

連載 第6回

# 幼児期からの アクティブ☆ チャイルド☆ プログラム

おもしろい、楽しい、体を動かす、子どもたちにとってもよい活動のアイデアを公開!

アイデアACP公開!

## 障がいのある 子どもたちと楽しく遊ぶ

指導の現場で「幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム」をどのように実践していけばよいかをレポートする指導実践編の第5回。今回は、吉田繁敬先生（中級障がい者スポーツ指導員）が福岡県北九州市の「竹の子プレイスクールスポーツ少年団」を訪ね、障がいのある子どもたちを対象とした遊び教室を展開しました。



スキップや声かけでコミュニケーションをとりやすく

今回は、福岡県北九州市で活動する竹の子プレイスクールスポーツ少年団を訪ね、障がいのある子どもたちを対象に、「遊び教室」を開催しました。

「幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム」に掲載されている指導法・指導技術は、幼児だけでなく障がいのある子どもを対象とした指導にも活用できるポイントが多くあります。今回の教室では、スキップや声かけでコミュニケーションをとりやすい6つの遊びを展開しました（27～28ページの写真参照）。以下に、指導上のポイントをあけてみましょう。

### ●楽しい雰囲気をつくる

発達障害のある子どもたちは、雰囲気の変化に敏感です。いつもと違う場

活動前、フラフープで子どもたちとコミュニケーションをとる



ラフープを使った遊びをやってみせたところ、すぐに興味を示し、打ち解けることができました。

### ●まずは体を動かす、声を出す

導入の遊びのポイントは、ルールが単純で全員が体を動かすことができたり、大きな声を出せたりすること。「言うこといっしょ、やることいっしょ」は、声かけに合わせてジャンプするといったシンプルだけど体を動かすこと自体が楽しく感じられる遊びです。しかも、遊びの仲間になかなか溶け込めない子どもも、手をつなぐことにより、スキップの効果で仲間と安心して遊べるようになります。「落ちた、落ちた」は一方的に声をかけるのではなく、相手からもことばを引き出すことができ、子どもたちの主体性を高めることができる遊びです。



しげよし 吉田繁敬  
〈指導者〉心理カウンセラー／東山スポーツ少年団

### ●飽きさせない

導入の遊びで「心と体のウォーミングアップ」ができたら次々にプログラムを展開しましょう。ポイントは、子どもたちが飽きることなく夢中になって遊ぶなかで、自然に心と体が育まれること。「新聞紙走り」や「新聞雪合戦」は、とにかく走る、思い切り投げることによって夢中になって体を動かすことができる遊びです。「ドカン！じゃんけん」では、順番を守る、負けたら交代するという我慢をしたり、ルールを守ったりするなかで、心の発達や社会性を学ばせることができる遊びです。周囲で見守っている保護者や指導者に入ってもらうことにより、子どもたちがその行動をお手本にして、よい動きの習得や社会性が育まれる効果が高まることを期待できます。

### ●必要なのは特別な配慮

障がいのある子どもたちを指導することは特別なことではありません。ただし、活動時に「特別な配慮」は必要です。例えば、ボールを指定の場所に配ったり、集めたりする「宅配便」という遊びをする際、黄色いボールは黄色い場

所に、青いボールは青い場所に、というように色を使うことでルールがわかりやすいような配慮をします。

障がいのある子どもたちは、幼少期に運動する機会が少ないのが現実です。全国のスポーツ少年団のなかにも、障がいのある子どもたちを受け入れる団がもっと増えてほしいものです。今回の遊び教室が、その一つのヒントになれば幸いです。



「ドカン！じゃんけん」。順番を守ろうね。後方でのぞいているのが竹の子プレイスクールスポーツ少年団の田中友治代表



みんなで手をつないで大きな輪を作ろう!

写真／佐々木啓次

遊び教室は、子どもたちが楽しめる簡単な「摸倣(表現)遊び」から始まり、新聞紙を貼り付けて走ったり、投げたりする遊びで徐々に運動量を増やしていきました。後半は「ドカーン! じゃんけん」や「宅配便」などゲーム性のある遊びで、大いに盛り上がりました。

## 1 言うこといっしょ、やることいっしょ

指導者のかけ声に応じて、前、後ろ、右、左へジャンプする遊びです。次にアレンジして友達と2人で手をつないでジャンプ。4人、8人と手をつなぐ人数を徐々に増やしていき、最後は全員で手をつなぎ大きな輪をつくってジャンプします。ジャンプすることによって、子どもたちの表情がほころんでいくのがわかります。



## 2 落ちた、落ちた

「おーちた、おちた」「なーにおちた?」のかけあいから、指導者が落ちてきたものを呼びます。子どもたちは、落ちてきたものをイメージして受け止めたりよけたりする動作をします。落ちるものによって、子どもたちにさまざまな動きが表れます。



## 3 新聞紙走り

スタートの合図で新聞紙を体の前に貼り付け、落とさないように走ります。新聞紙が床に落ちてしまったら、そこでおしまいです。最後まで新聞紙を落とさずに走り続けた子の勝ちです。





雪玉は  
いくつ  
残ってる?

#### 4 新聞雪合戦

新聞紙を丸めてボール(雪玉)を作ります。子どもたちは2組に分かれ、雪玉を相手陣地へ投げ込みます。ひたすら投げて、残った雪玉が少ないほうの勝ちです。



#### 5 ドカーン! じゃんけん

2組に分かれ、コースの両側から同時にスタートを切り、出会ったところで両手を合わせて「ドカーン!」。じゃんけんをして、勝ったほうが前に進み、負けたほうは道をあけて、次の子がスタートします。じゃんけんに勝ち続け、相手陣地まで到着したら1点となります。



#### 6 宅配便

各スタート地点にボールを3つ置きます。スタートの合図で、1人がスタート地点の先に3か所ある指定された場所にボールを置きに行く動作を3往復します。次の人は、ボールを取りにいて、スタート地点に戻す動作を3往復します。今回は、黄色には黄色いボール、ピンクにはピンク色のボール、青には青色のボールと、色を使いルールをよりわかりやすくしました。

#### 竹の子プレイスクールスポーツ少年団



竹の子プレイスクールスポーツ少年団は7年前に結成された「障がいのある子どもたちを対象としたスポーツ少年団」です。ほかに障がいのある子どもたちが所属するスポーツ少年団や総合型地域スポーツクラブはありますが、現状ではまだ数が少ないようです。そんななか竹の子プレイスクールには、小学生から社会人まで36名が在籍し、北九州市近郊の特別支援学級(小学校9校、中学校4校)や特別支援学校(3校)から団員が集まっています。

創設者で代表指導者の田中友治氏はじめ指導者(5名)は、校長経験者3名という強力な布陣。活動

は毎月第1、第3、第4水曜日の午後3時30分から5時まで。季節によって水泳、カヌー、ボルダリング、野外炊飯、学習教室などの活動も行っています。

田中氏は、「日独同時交流でドイツを訪ねたとき、障がいのある人たちの活動に触れ、日本が遅れていることがわかりました。障がいのある子どもたちを、放課後に受け入れる場所もあまりないのが現状です。障がいのある子たちに、「やればできる」という自信をつけさせたい。その気持ちで少年団を立ち上げました」と、子どもたちを温かく見守ります。



# 子どもたちを元気にするための 具体的なアプローチを続けていこう

**富田寿人**

(幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム普及ワーキンググループ班長)

## 約1,000人の指導者が普及講習会に参加

2015年春に『幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム(ACP)』のガイドブックが完成しました。全国のスポーツ指導者の皆さんをはじめ、幼稚園・保育所や小学校の先生方にこのガイドブックを周知し、いかに活用していただくかが初年度の目標でした。

そのため、日本スポーツ少年団では全国12地区で「幼児期からのACP普及講習会」を計画し、'15年11月から'16年3月にかけて開催しています。9地区終了時点で約700人の方々が受講し、1年間で1,000人を超える見込みです。「幼児期からのACP」普及という意味では、大きな成果が得られたと考えています。

講習会では幅広い年齢層の受講者を迎えることができました。また当初は、スポーツ少年団指導者の参加を多く見積もっていましたが、幼稚園・保育所や小学校、教育委員会の関係者の方など、さまざまな立場の方の参加を得られたのがうれしい誤算でした。これらの皆さんは「現場の教育活動のなかにACPを取り込みたい」という意気込みを持たれていて、「幼児期からのACP」への関心の高さを実感できました。

## 来年度は新たに講師講習会を開催予定

2016年度も、初年度とほぼ同規模での普及講習会を計画しています。開催時期は'16年7月から'17年2月まで、全国8会場以上で実施する予定です。「幼児期からのACP」に興味のある方はぜひ参加してください。

また、'16年度は「幼児期からのACP普及講習会」のほかに、「幼児期からのACP講師講習会」も計画しています。講師を養成することにより、県内の市区町村レベルの講習会や研修会で、「幼児期からのACP」をもっと普及・活用してもらうことが目的です。今後は、この講師講習会を受講した指導者の方々に、在住地域での「幼児期からのACP」の普及活動を担ってもらいたいと考えています。

具体的には、各都道府県体育協会から推薦された指導者(原則各県3名)を対象に、理論や実技を学び、指導実践を体験する1泊2日の講習会を予定しています。期間は'16年10月から'17年2月、全国3会場で開催する予定です。

## 「体を動かすことが楽しい子ども」をもっと増やそう

第18回(2015年度)秩父宮記念スポーツ医・科学賞で、「『アクティブ・チャイルド・プログラム』普及・啓発プロジェクト」が奨励賞を受賞しました。体力の低下傾向、「運動する子」と「運動しない子」の二極化が進む日本の子どもの現状のなかで、ACPは「子どもたちを元気にする具体的なアプローチができたこと」が評価されたためと思います。かけ声(理論)だけではなく、具体的なプログラムを作成し、普及講習会を開催してきました。ACPがすぐに成果をあげるとは思いませんが、じわじわと浸透して効果が生まれてくるはず。子どもたちだけでなく、指導者や保護者も巻き込みながらの活動は、やがて社会現象になっていく可能性もあるのではないかと、私は感じています。

「スポーツ」というと気が引けてしまう子どもは多いようです。しかし、「体を動かして遊ぼう」というと、子どもたちは元気よく体を動かすと思います。このような活動のなかでACPを活用し、「体を動かすことが楽しいというファン」をどんどん増やしていくことが大切です。「ファン」から「スポーツ」を始める子どもが出てくるようになるでしょう。求められているのは、指導者が子どもたちを上手に導いていくことです。

スポーツ少年団では現在のところ、団員登録は原則として小学生以上となっています。しかし、近い将来、幼児期の子どもでも登録できるように、その枠を広げることを計画しています。そうなれば、幼児期の子どもたちが地元で「運動遊び」をする機会は、さらに増えるはず。運動遊びから「スポーツ遊び」へ、そして「スポーツ」へと道筋ができればよいのではないのでしょうか。



\*写真はイメージ